



今何が起きているか、分かったのだろうか？

～1年をふりかえって～

ウィルあいち交流ネット会長

森田 登喜子(ウィル 2000)

3月に入って最後のイベント「写真展～紛争地に生きる人々」を終え、夜台所に立っていて、ふと「ああ～終わった」と思いホッとしました。がすぐに、「終わっていない人々がいる」と浮かんで背筋が寒くなりました。川口リュドミラさんのお話、玉本英子さんの映像とお話で恐怖を感じたつもりでしたが、まだまだ遠かったのだと痛感しました。今は故国への支援を続けるリュドミラさん、戦地に赴こうとしている玉本さんという「人」を通じて、戦火に苦しむ人々を心から応援したいと思っています。

1. 初めに、テーマ

今年度、まさか3度目の代表を仰せつかるとは思っていませんでした。戸惑いながら、まったくの白紙の気持ちで初めました。

最初の課題はテーマでした。会員一人一人の意見を聞き、今の関心がロシアのウクライナ侵攻をきっかけとして「戦争・女性・弱者」にあることが分かり、「いくさ世の私たち」をテーマとしました。しかし、すぐには目処が立たないまま、年度末のセミナーに向けてできるだけテーマを掘り下げていこうと思うばかりでした。

いくさ世の私たち～

2. とにかく、学習をしよう

会員は忙しい中遠くから時間を取って会議に参加しています。誰かが決めたことに従って自分の役割を果たすだけでなく、何かを得て帰りたい、という言葉が以前からよく聞かれていました。昨年の「選択的夫婦別姓」の学習会の経験をふまえ、とにかく皆で学習の機会を持つことにしました。

《学習会Ⅰ ウクライナを知ろう！》

長く日本にいらっしゃるウクライナ人の川口リュドミラさんのお話を聞くことができました。故国を誇る気持ち、故国を案じる身を切られるような想いを語る生身のリュドミラさんを通じて、苦難の中にあるウクライナという国を身近に感じました。日々の活動は、厳寒の中で動く人たちに日本の貼るカイロを送るなど、現実の生活を知る人ならではの身に迫ったものでした。本当に辛い日々だろうと、深く同情するとともに、率直に話して下さったリュドミラさんに感謝しました。

*リュドミラさんたちのことを多くの人に知って欲しく、天白区の人権事業で「ひまわり」の映画上映に併せてお話いただきました。多くの人から「よく分かった」という言葉をいただき嬉しく思いました。

2022 ウィルあいち交流ネット学習会 I

いくさ世の私たち～
ウクライナを知ろう！

お話し：川口リュドミラさん

- 日本ウクライナ文化協会理事
- ロシアのウクライナ侵攻で難民を受けたシトーニル市（シトーニル市の美しい町）の出身
- 2011年から難民4人で事業所に在籍
- 被災への防衛活動や被災支援のために奔走する日々

日時：8月28日（日）
10：30～12：00

場所：ウィルあいち 2F 共用会議室

参加費：1,000円
対象：ウィルあいち交流ネット構成団体および関連団体会員
定員：25名（申込み後、8月20日まで）
申込み：ウィルあいち交流ネット
電話：052-962-2512 ext.2512
問合せ：あいち男女共同参画財団
企画協賛：052-962-2512

《学習会Ⅱ 歴史の中の人権》

リュドミラさんのお話を振り返り、「戦争の中で女性や子どもの人権が踏みにじられている」と話し合いました。しかし、あらためて考えると、「人権」と言葉は難しく、それに「そもそも侵される人権があったのか」という疑問にぶつかりました。「人権とは何？いつからあったの？その歴史は？」という大きなテーマで日置雅子先生にかみ砕いてお話していただきました。そして、日本の女性の人権は「獲得してたかだか80年しかない！」と分かりました。「人権」は、まだ慣れない衣で自分のものになっていませんでした。その弱さは私たち女性の生活の底に大きな不満としてとぐろを巻いています。いつもそれが鎌首をもたげて日々の生活の中での不満、理不尽だという社会的な怒りを呼び覚まします。私たちは、怒りがどこから来るのか、もっと深掘りし、根本から変えていかなければ、いつまでも「本音と建前の違う男女平等社会」の中で生きなければならない、とあらためて思いました。



3. セミナー開催！写真展も・・

学習会の成果をふまえ、今年もセミナーをしましょうと目標を立てていたのですが、具体的な案がなかなか浮かびませんでした。財団から「豊中すてっぷ」で映像ジャーナリスト玉本英子さんの講演があったと聞いて、「それだっ！」と、飛びつきました。「本当のことが知りたい」のが、私の永遠のテーマです。「自分で行くことができなくても、見聞きした女性の言葉を聞けば、もう少し分かるのでは？」と会員の皆さまの意見がまとまり、実現に向けて動き出しました。とはいえ、フリーランスの活動をしている方との交渉には、少々戸惑いました。何しろ、交流ネットは徒手空拳の身、経済的にも人力にもウルトラ C が要求されました。でも、さまざまな努力で、実現できたのは何よりでした。玉本さんのビデオをもとにした講演は迫力満点で、「生の声を聞いてよく分かった」と大好評でした。

また、「豊中すてっぷ」で行なわれた写真展も大変魅力的で、「できれば私たちも・・」と思いました。しかし、交流ネットの実力では講演会が精一杯でした。そのため、2回の学習会に参加くださった「地域開発みちの会 SDGs プロジェクト(以後みちの会、私もメンバー)」との共催を考えました。さいわいみちの会と財団の了承も得られ、三者の共催で写真展に取り組むことになりました。

玉本さんの写真は貴重な著作物です。慣れない展示品の扱いには肝を冷やしました。写真展には、本当にいろいろな人の努力が結集しました。展示会会場作りはもとより、日々立ち会って観賞の呼び込みまでしてくださった方々、見てくださって感想を寄せてくださった方々、寄付をくださった方々、講演会の実現ともども、皆さまに感謝するばかりです。私は途中で風邪を引き、写真展の立ち会いのお役に立てなかったことが残念でした。

なお、セミナーと写真展の詳細な報告は、この通信に記載されています。



4. ネットワークということ

ウィルあいち交流ネット(以後交流ネット)が発足した 2001 年当時、ウィルあいちでは 1 年間の講座が幾つか持たれていました。その修了生の多様な団体のネットワークが作られました。現在は愛知県男女共同参画人材育成セミナーの修了生ですが、セミナー参加者が既に種々の活動に携わっているため交流ネット全体の人材は大変豊富です。また、20 年余の活動の積み重ねは全県にまたがるネットワークとなり、大きな活動をする力になっています。今年度交流ネットとみちの会の共催ができたのもそのおかげです。

つくづく思いますのは、ネットワークはまず一人の人の中で作られるということです。その人が投げる糸が他の人の糸と絡まり次のネットができていくと思います。

どんな共通のテーマがあっても繋がる糸がなければネットワークはできません。

「男女平等、女性の活躍」という大きなテーマの下に一人一人が繋がる糸を紡ぎ続けたいものです。

5. なかま de セミナー

交流ネットの会員はいろいろな活動に携わり、力があります。毎月1回、1時間半の会議では充分な交流は難しいのですが、短時間でもお互いにチューターになりあって学習の時を持ちたいと思いました。

今年度は「紙面クルクル」、「SDGs カルタで語ろう 1, 2」、「続ホハレ峠と私」、「『私の大切なもの』のワークショップ」、「LGBTQ の絵本」の6回を行ないました。日頃の思いや活動、広めたい事柄などを発表する機会であり、また知らなかったことを知る良い機会になりました。



6. ウィルあいち交流ネット通信

交流ネットは発足以来「通信」を発行し続けてきました。巻頭は参加団体から寄稿する自由な形式を保ち、その時々々の情報や会員の活動紹介なども行なってきました。発行当時はまだ女性センターの情報誌発行がめずらしく、ウィルあいちへ問い合わせがあったと聞きました。

今年度は編集グループを立ち上げて、協力し合って 106~109 号を発行しました。編集方法が毎月変わるのも、お互いのメソッドが紹介しあえて興味深いと思います。年間4回の発行は難しい時もありますが、会員の意見、交流ネットの活動報告やその時点での課題、情報を掲載して、これからも続けて行ければと願っています。



「戦時下の女性たち ウクライナ・中東の取材映像から」を開催しました

板倉 純子（ひかるよ'15）

2023 年 2 月 25 日(土)、映像ジャーナリスト玉本英子氏をお招きし、ウクライナ・イラク・シリアの取材を通じた現地取材報告についてお話いただきました。私たちが行くには遠い、そして政治的に大変難しい地域を長い間取材してこられました。

ウクライナのこと、中東のこと、特にロシアによるウクライナ侵攻が開始(2022 年 2 月 24 日)されてから 1 年になるこのタイミングで、テレビや新聞では伝えられない生の声・生の姿をお聞きかせいただける貴重な経験となりました。

最初に玉本氏が、今に至った映像ジャーナリストとしての原点について

「同じ時代を生きる人たちの状況や思いを知り、伝えたい」と、お話しして下さいました。「ずっと、ずっと伝えたい」という気持ちが原動力となったこと。

私の中になかった考えだったので、衝撃的な言葉となりました。行動力のある考え方、心の中で思っていて実際に行動して実行する姿に感銘を受けました。

ウクライナ(南部とオデーサ)、戦争と隣り合わせの日常について

オデーサは、ウクライナの中で人口が 3 番目に大きい町として知られています。ロシアの侵攻で、国外に逃れた住民も多い中、一日数回防空サイレンが鳴って、地下避難所に避難することが日常化していました。避難所にはたくさんの市民の方がいて、戦時下なのでオデーサだけではなく、どこの町でもあちらこちらにウクライナ軍を称える看板が設置されていました。

私の日常生活の中にミサイルの着弾する音が聞こえてきたら・・・と考えただけでも言葉にならない恐怖で精神的に押し潰されてしまいます。

2022 交流ネットセミナー

戦時下の女性たち

～ウクライナ・中東の取材映像から



講師 玉本 英子さん
(映像ジャーナリスト)



市民にあいつぐ犠牲、(オデーサ・セルーフカ)について

ロシア軍のミサイル攻撃で破壊されたアパート(2022 年 7 月)の外側の窓も全部なくなって、壁も全部なくなっていました。部屋の内部を見たら壁側も燃えていました。ミサイルが着弾した時、被害者は、たまたまコンクリートの壁のそばにいたため、ミサイル攻撃の被害に遭わずにすみしました。しかし、アパートの前の道路の道にはたくさんの方が運び込まれていました。

生き延びた人の紙一重の出来事を知って、背筋が凍る気持ちになりました。「なぜ市民が狙われるのか・・・」と憤る被害者たち、「市民が何をしたんだ」という被害者の言葉、理不尽さに怒ることしかできません。心の傷、幼い子供の爆発の記憶、小さい子供でもその時のことをよく覚えていました。

「子供たちの取材を慎重にしないといけない」と玉本氏は語ってみえました。心に傷を負った子供たちが、今でもウクライナでたくさん増えているということを、ウクライナのセラピストの方が話されていたそうです。

ロシア軍と対峙するウクライナ軍・偵察小隊の同行取材について

ミコライウとヘルソンにまたがる農村地帯は、ここで戦争が行われるということはなかなか想像しにくい場所でした。ロシア軍陣地まで 4 キロの最前線でドローンを使って相手側の状況を知り、ウクライナ軍とロシア軍がお互いに次々と砲弾を撃ち込む戦いの方法を知った時には、ここまで戦争の戦い方が変化していることに大変驚きました。破壊された村に住んでいた人たちは、本当にどんな辛い思いで家を離れざるをえなかったのか。「いつ何が起こるかわからない」何があってもいいように、準備しておくことが大切だと痛感しました。

市民防衛隊について

民間人の中で、町を守るため、自分たちの身を守るために何か学べるものはないか？と手をあげた人たち。これは何か強制されるものではなく自分たちで手をあげた女性たちも多く参加していました。建物侵入・制圧訓練の訓練を行っていました。その建物や家が安全かどうか確認するのです。その確認ができた後、避難していた人たちが戻ること。女性も男性も関係なく訓練に参加しています。女性のひとりが言っていたのは「自分たちが、まさか銃を持つなんてことは、1 年前までは信じられなかった。自分の身に起こることとは思いませんでした。もう平和な市民ではいられなくなった」と取材での言葉。玉本氏の心に強く残ったそうです。

私も同じような状況になったら！と考えさせられました。

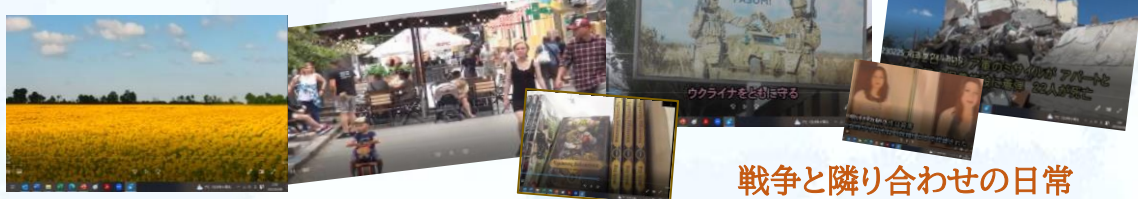
学校と教師について、オデーサの小学校(地下シェルターの設置～戦時下の学校)について

対面授業ができるのは地下に避難所がある場所です。地下に避難所がある場所とない場所は何が違うのか？ソ連時代につくられた建物の多くは地下避難所があります。91 年にウクライナが独立してからは、核攻撃に備える必要もなくなったので地下避難所はつくられませんでした。ロシア軍に制圧された東部ヴォルノヴァハから逃れてきた教師は、命がけで着の身着のまま町を脱出しました。支配地域では、ロシアで教員募集し高額報酬で支配地域に派遣するなどで、新学期からカリキュラムは、ロシアの教育内容に沿ったものになりました。これまでのウクライナの教育が間違ったものと子供たちへ教えられのではないかと先生は危惧しておられました。子供たちの教育が戦争の影響で翻弄されていることに心が押しつぶされる思いです。

日本のアニメ・マンガを心の支えにする少女について

ウクライナの若い子たち、戦時下の今どんな思いでいるのか？どんな状況なのか？TikTok やインスタグラムで「鬼滅の刃」コスプレ動画を投稿するなど、日本のアニメやマンガはウクライナで非常に人気があります。辛い時も日本のアニメやマンガが心の支えになっていて、アニメショップにみんなコスプレで着飾って行くのが本当に彼らのストレス解消の場になっていました。その中に、ウクライナ兵の父親が 7 月末のロシア軍のミサイル攻撃で戦死した 17 歳の子がいました。本当にこの戦争がなかったら死ぬ必要がなかった人たち。小さい子は思っていることを何でも言葉にして話してくれます。一方、10 代の子は心の中にずっとずっと気持ちを押し込めている。心の傷はなかなか見えて来ないし、深いことを考えさせられました。玉本氏の取材時の心境が伝わってきます。

生の声の迫力！



イラク・シリア過激派組織「イスラム国」(IS)のヤズディ教徒虐殺と女性拉致について

IS はイスラム教を自分たちに都合のよいように考えました。ヤズディ教を悪魔崇拝と決めつけ、かれらが住む町や村を襲撃、イスラム教へ改宗させようとしていました。宗教というのは、その人の人を形づくくらい大事なものです。簡単に宗教を変えることはできません。改宗を拒否したヤズディの男性たちは銃殺されました。そして女性や子どもたちを拉致、奴隷とみなし、女性を強制結婚させ、レイプしました。そして戦闘員どうしで転売しました。

2018 年にノーベル平和賞を受賞したナディア・ムラドさんは、IS に拉致された女性のひとりです。その後脱出し、自分の辛い経験を伝えることで、IS の非道を国際社会に訴えました。取材に協力してくれたヤズディ女性たちの経験は非常に辛いものでした。それでも「伝えなければ、なかったことになる。国外の人に知ってほしい」と顔を出して取材に応じてくれました。

私も同じ女性として、このような過酷な現状を知り、苦しみました。

IS と戦う女性戦闘員について

IS に包囲されたシリア北部の最前線で、自分たちも銃を持って戦うと、手をあげ、訓練を受けてスナイパーになった女性たちがいました。彼女たちも先程の市民防衛隊と同じ、純粋な気持ちで自分たちの町を守りたいという思いで戦っています。しかし、その後、戦ったことによるトラウマに苦しむ人たちも少なくありませんでした。ある母親は、息子が IS と戦い戦死、ひつぎにすがり涙しました。息子を失った悲しみだけではなく、働き手を失ったことで、困難な生活に追い込まれることになります。

人々の日常生活が奪われ、壊されている現実に関心が揺さぶられました。

最後に、全ての人が例外なしに巻き込まれるのが戦争です

戦争は、いったん始まると止めるのは容易ではないことを知りました。終結しても互いの傷は深く刻まれます。講演会の終盤で、玉本氏が取材を始めた時の気持ちを改めて伝えて下さいました。「ウクライナ・中東の方々の境遇に思いを寄せて、1 人 1 人がこういったことに他人事だと思わずに関心を寄せることが大切なのではないでしょうか」「今の状況を知る、関心を寄せること、それは将来、自分たちの身に起きたらどうするのか？などにも繋がっていくのではないのでしょうか」と、今後私たちの生き方に大きな参考になる内容ばかりでした。

質問タイム

質問してくださった 2 名の方に対して、玉本氏は「私にとっても大切な質問だったと思います」と感謝されました。貴重なご意見をいただき、私も大変勉強になりました。できることは限られていますが、一日も早く戦争が終結されることを願うばかりです。

講演会に参加いただきました皆様、誠にありがとうございました。



《アンケート結果から》

参加者は 6, 70 代で名古屋市内と周辺の無職女性が主でした。主な声をあげます。

- 熱のこもったお話しで期待以上でした。
- IS やヤズディ教徒の虐殺を知らなかったの、今後映像を拡散して欲しい。
- 玉本さんの使命感に打たれ、自分も関心を持ち続けたいと思う。
- 「戦争は怖い、敵も死んで欲しくない」という少女の言葉が辛かった。
- 「戦った女性は見たら分かる、細い人が戦っている」という現実の辛さが胸に迫った。

初めての写真展

山田 和枝 (Step'9)

「玉本英子写真展 紛争地に生きる人々」は玉本さんの講演会を準備する中で発案され、急遽決まった企画です。あれやこれやで話が進み、私自身もどう関わればよいのか先も見えぬ中走り出した写真展でした。とにかく写真展会場となるウィルあいちの展示コーナーに足を運び、そこに参加された方々と共に送られて来た写真を傷つけぬよう展示する作業に取り組むこととなりました。

まずはパネルに写真を1枚1枚入れ、パネルの角をネジで締めるという非常に細かな仕事がありました。手先の不器用な私はパネルの枠組みをうまく合わせることができず、四苦八苦の作業でした。しかし何か事をなすということは、こうした目に見えない仕事の上に成り立っているのだと教えられているようで、貴重な体験でした。

そしてそのパネルを壁面の上から吊り下げられた鎖にひっかけるということで、脚立を使用することとなりました。70歳過ぎの女性ができる仕事ではありません。そこは「地域開発みちの会」の多大なご尽力により飛び切りの仕事人が舞い降りてきました。天女のように脚立を駆使し、無事パネルの展示が完成したのでした。本当にそんな彼女を見てみると、ここは三保の松原かと思ってしまいました。多くの方のご協力で展示会場を作ることができました。皆さん本当にありがとうございました。

写真展の写真を1枚1枚眺めながら、この地球上には紛争地に生きる人々がいること、そしてウクライナ・イラク・シリアの情報などは様々な形で私たちに届けられてはいましたが、どう受け止めてよいのか解らず、どこか素通りしてしまっているのが現実でした。しかし講演会を通し、玉本英子さんと直にお会いして、「この方が写真家の玉本さん!」、私の勝手なイメージが覆る瞬間でした。でも昼食の味噌カツを二人分あつという間に平らげたそのバイタリティー、見ていて間違いなく写真家玉本さんと納得することができました。話の端々からその魅力にすっかり引き込まれてしまう中で、彼女は私の心に波紋を投じてくれました。イラク・シリアの中東問題等が彼女を通じて身近に感じられるようになりました。この気持ちがどう次につながるのかまだ分かりません。でも、今は玉本さんのご無事とますますのご活躍を祈るばかりです。



悪戦苦闘の末展示しました

パネルにも貼りました

少女の頭の弾痕

講演会后多数が観

《アンケートの声から》

「紛争地に生まれたというだけで過酷に生きることを迫られた人がいる事を突きつけられ、そこで生きている人たちの抱える痛みは自分には想像すら及ばないことが悲しいが、写真の人たちの表情から確かに伝わってくるものがあつた。大学では国際系の学問を学び、自分の足で現場に行つて、人々の声を聞きたいと改めて思った。」(10代女子、大学受験勉強中の学生)

第5回「なかま de セミナー」

「SDGs カルタでおしゃべり 2」

森田 登喜子(ウィル 2000)

SDGs カルタにも慣れたところで、2 回目のワークを行いました。3枚のカルタを取って読み、そこから思いつく my story を話すワークです。上手くいきそうになれば、もう1枚カルタを取って1枚を捨てます。トランプのノリで楽しんで欲しいですね。

SDGs は持続可能な地球、人の生活を残すために世界が解決しなければならない問題を目標としています。大きすぎて、とっつき難く思われる事柄を自分の生活に引きつけて考えるのに良いワークです。カルタの言葉もそんな風に日常の言葉で書かれています。私たちがおしゃべりの中から自らの言葉を紡ぎ、「私たちの SDGs カルタ」を作るのも面白いと気づきました。

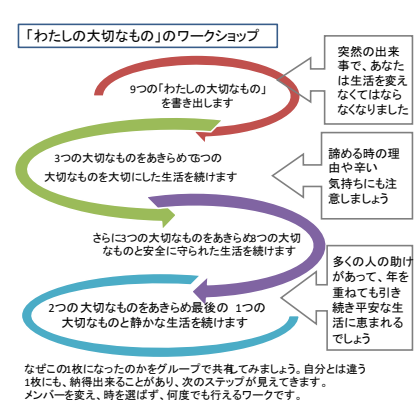
第6回「なかま de セミナー」

「わたしの大切なもの」のワークショップ

杉本 浩子(Amelie '10)

世界最大級の神社フェスで行われた「自分が死ぬ前に考えるワーク」とか、自己理解の価値観並べ替えカード(80 以上のカードと取り組まなくてはならない)ワークとも違う、日常でできるワークはないかと考えていた所、岩波ジュニアブック「シアワセなお金の使い方」で南野博忠氏があげた、9 つの大切なものを考えだすワークと出会ったので、何度か地元の活動で試していました。9 つから徐々に少なくしてゆき最後の一つにたどり着くワークショップが、本当に私たちの自己理解を高めるのに役立つのか悩んでいたところ、「なかま de セミナー」でのチャンスを頂き、交流ネットグループの皆さんと実施いたしました。選ぶテーマに縛りはない。その時のあなたの身の回りの出来事によって選んでいく過程のストーリーは様々に変化する事を考慮しました。

今、消費者として真ただ中にある方、生活を軌道に乗せて次の生き方を考える方、家族の看取りを経験された方など、最後の一枚は本当に様々だということが共有出来ました。どの一枚も、素敵で貴重な一枚が選ばれた事で、どれだけの価値があるのかと迷っていた雲が徐々に晴れてきて、このワークの真の力を感じる事ができました。今回共に体験して頂いた皆様に感謝！本当にありがとうございました。



ウィルあいち交流ネットは、ウィルあいちセミナー等の受講修了生による
自主活動グループによって組織されている団体です

さわらび会 / メンズリブ名古屋 / 女性学 '98 の会 / グループキーツ / ウィル 2000/I.W.L
ウィル Do2002 / サーティネット '05 / ベリーズ 18 / Step07/ Fem.'09/Amelie '10
ひかるよ '15/ そだね！2017/ Hey Say Final/Reiwa'19/ みつ 2020/ リモート 2021

編集発行:ウィルあいち交流ネット 協力:(公財)あいち男女共同参画財団 2023 年 3 月発行